

CLC からしだね書店便り



CLC からしだね書店では…

- ① キリスト教書のほか、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチ等をご提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みに来てくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設します。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書の販売もする予定です。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供したいと考えています

読書感想本

「落ち穂を拾うー福祉と福音」

（坂岡隆司 著 いのちのことば社 1320円《税込》）



「落ち穂を拾う」です。

（CICからしだね書店店長から受験生A君への手紙を、読書感想にさせていただきました。A君に読んでほしい本です。）

「なんだかどうもうまいかなくて、でも、最後までがんばった 受験生の君へ」

目指していた第一志望の国立大学が不合格になり、一生けんめい気持ちを立て直して臨んだ後期試験、またしても不合格。

今年、どうしても大学生にならないといけない事情を抱えた君は、補欠募集を出した大学を探し当て、青春18きっぷと願書を握りしめて、家を飛び出していったと聞きました。

大学を探し当て、青春18きっぷと願書を握りしめて、家を飛び出していったと聞きました。

18歳。大人になる前の大きな試験。

大学受験に親がくっついていく時代に、君はたった一人で、重なる「不合格」の知せに心が折れそうになりながら、確実に進路を決めていく友人たちに「おめでと」と言いながら、どんどんひとりぼっちになりながら、それでも必死で闘っている。

自らの道を探しあてようとしている。

すごいなあ、と、ただただ、すごいなあ、と思います。



ストレートで、有名大学に合格する能力と努力、それはそれです。すごいことです。

でもそんなことよりもすごいのは、君のその「悪あがき力」です。ここぞという時に、ちゃんと「悪あがき」するその力を18年の間に、君はちゃんと養ってきたのです。

落とされても落とされても、18歳の君は、自分の人生に食らいついていくのです。

がんばった結果が報いられて、順調に門戸が開かれていく人たち、それはあたかもボアズの畑の収穫物を、十分に手にすることができた人たちのようです。

一方、君は、思い描いていた畑の収穫物にありつけず、遠方の畑まで走って行って、残しておかれた落ち穂を、腰をかがめて拾って回る人のようです。

畑の収穫物は、畑の所有者のものではありません。陽を照らし雨を降らせた神様のものです。だから、神様は君のために、畑の所有者に命じられました。

「落ち穂」を「残しておきなさい」と。

「落ち穂」は、君のために「君のものとして」神様が残しておかれたのです。

駆けずり回って、はあはあ息を切らしながら、汗をかきながら、腰をかがめて、君はその泥にまみれた手で、神様からの「とっておきなさい」の「落ち穂」を、労して拾うのです。君の独り立ちの第一歩が、「落ち穂」であったこと、このことこそ、神様からのすばらしい贈り物です。

どうか、胸をはって、堂々と、自分で探しあて、自分の手で拾った「落ち穂」でお

君の人生は、良いもので満ちています。祝福で満ちています。

今回は「ルールは子どもを縛りつけるためにあるのではない。自由な存在として共に生きていくためにある」というお話をしました。それではどのようにしてこのメッセージを子どもに伝えていけばいいのでしょうか。たとえば、私のことを乱暴に呼び捨てにしてくる子に対し、どう接するか。「そんな風に乱暴な呼び方をしてはいけませんよ」等と言おうものなら、余計に面白がって連呼してくるでしょう。そんな時、私はまずスルーすることになっています。「10年以上を呼び捨てにするな!」と叱ったりはしません。「10で叱ってしまうと彼が自分の体験から自発的に学ぶ機会を奪うことになります。」

私は『○○くん』と呼んでください」と、視線を合わせて、穏やかにキツパリと伝えます。そのあとはいくら呼び捨てにされても全部スルーします。すると、彼らは「反応がなくてつまらない」と思うようになります。

しかたなく「大路くん」と呼んだ瞬間、私は「なに?」とニコニコして振り返ります。「ああ、『くん』だけで呼んだら、この人は振り返ってくれるんだな」と、その子は思うでしょう。また、「呼び捨てにされたら人は嫌な気持ちになるんだな」と思うかもしれません。これが「体験から学ぶ」ということです。もちろん、呼び捨てが苦にならない、という大人もいるでしょう。しかし、私個人としては「呼び捨てにされたくない」と思います。スルーすることは「今のままの態度が続けられると、私はあなたとは共存できません」というメッセージなのです。

また、私は彼らに「将来、失礼な言動をとる大人になってほしくない」とも思っています。「将来的にいろんな人と共存できる人間になってほしい」と思った時、「君のその態度でしんどい思いをする人もいるよ」ということを伝えなければなりません。そう感じました。

集団遊びに参加しないで挑発してくる子に対しても、原則は同じです。あえてスルーし、参加できるメンバーだけでサッカーを楽しみました。すると、彼らはつまらないと思ったのか、一人、また一人とサッカーに混じってきました。

私は「スルー」という「ことば」で彼らと対話したのです。大人は子どもよりも口が達者ですから、ついつい「言語で」訴えたくくなります。しかし、「言語」は、子どもにとって必ずしも馴染みのある「ことば」ではありません。特に子どもの場合、「体験させる」ことが有効な「ことば」になる場合も多いのです。

環境や時間設定も見直しました。そもそも、「いつでも取れる位置にボールがある」から、会堂内でドリブルをするのです。危ないものは手の届かないところに置いてもらい、大人の許可のもとで使うことにしました。このように、物理的な環境デザインもまた、彼らに通じる「ことば」(メッセージ)となり得るのです。試行錯誤の結果、私たちは「相手がやろうとすることを無制限に受け入れる」のではなく、「ルールをあらかじめ具体的に伝えておく」、そして、「一度決めたルールは一貫して守る」という方針で対応することにしました。

少し視点を変えて、別の事例から考えてみましょう。カトリックのシスターであり、大学教員でもあった渡辺和子は、レポート提出の期限を守らなかった学生に次のように告げたそうです。



「やがて社会に出てゆくあなたに、甘えが通用しないきびしさがあることを、今のうちに知ってほしいからこそこの処置なのです」(渡辺和子『幸せはあなたの心が決める』PHP研究所、2015年、31頁)

私はこの言葉から次のようなメッセージを受け取りました。「私はあなたを人格として認めるからこそ例外を認めない。ここで例外を認めたら、あなたのことを『ルールを守れない人間』『自分で責任を取ることでできない人間』に、貶めてしまうことになります」。

正直、私がこの学生の立場なら、「なんだよ、ケチ！」とへそを曲げてしまいそうです。しかし、そこは教育者。「大目に見た結果、約束を守れない人間になってしまう」ことと、「今厳しくしても、将来約束を守る人間になる」こと。この二つを天秤にかけた結果、後者を選ばれたのでしょうか。

「しょうがないなあ。かわいそうだから今回だけは許してあげるよ」。こんな風に許容することは一見優しさに見えます。しかしそれは、裏を返せば「あなたはルールを守れない程度の人間です」と伝えているのと同じです。相手を人格として尊重するからこそ、ルールを守りぬくのです。

ただし、イエスやパウロが当時のルールに対して、かなり挑戦的に振る舞っていたことも、忘れてはいけません。イエスやパウロの言い分はこうでした。「自分を愛するように隣人を愛すること」。これこそ律法の根本精神である。したがって、「愛と自由」という精神につながるようなルールは、ルールとしての正当性を失っている(ガラテヤ5:14)。

私たち大人は、子どもに様々なルールを課します。が、果たしてそのルールは本当に彼らの「愛と自由」

に、人間的な成長につながるものなのでしょうか。その背後に、大人の自己満足や支配欲求といった動機を隠していないでしょうか。特に子どもが幼いほど、ルールの正当性に疑義を呈することは難しくなります。そうした意味で、ルールを課す側の大人は、課される子ども以上に重い責任を負っていると云ってよいでしょう。

初代教会の人々は、徹底的な話し合いの末に、伝統的なルールを変更したり、大胆な解釈を提案したりしていました。私たちも建設的な対話を通して—できるかぎり子どもたち自身を輪に加えながら—ルールの正当性を常に吟味し直していく必要があります。

もちろん、私たちは神様とちがって、完璧なルールを作れるわけではありません。むしろ、穴のないルールを作ろうとすればするほど、規則が細分化し、混乱してしまうものです。

札幌農学校の初代教頭、クラーク博士は、「規則はひとつあればいい」と言いました。『Be gentle man!』(紳士たれ)がそれです。ルールがこれ一つになると、学生たちは自分の頭で考え、互いに尋ね合わなければなりません。「果たして、この行為は紳士的か?」「私たちは、互いに紳士らしく生きられているか?」と。クラーク博士のこの言葉は、ルールは最小限でよいこと、重要なのはルールの完成度ではなく、吟味と調整の過程であることを、私達に教えてくれます。

私たちは、一体何のために子どもを「しつけ」たいのでしょうか。「当たり前」とされているルールは、そもそも何のためにあるのでしょうか。子どもたちと共に、常にその点を吟味し合える大人でありたいと、私は思うのです。



からしだね館のひこじま こころ病む人の支援



京都市東部障害者
地域生活支援センター
からしだねセンター主任
武山 世子子
(精神保健福祉士・
相談支援専門員)

今回は、こころの病により「自分への信頼」「他者への信頼」「社会への信頼」を失ったAさんのストーリーを内容を少し変更して、みなさんとお分かちさせていただきます。彼女の経験した喪失体験から、いろんなことを考えさせられています。

Aさんの喪ったもの

Aさんは、精神科の病院からの紹介で、開所間もないからしだね館に来ました。彼女は当時20代半ば。数年前にこころの病を発症しながらも、他府県のスーパーで仕事をしていました。ある日、妄想にかられ、京都までやってきたのですが、パニックのような症状を起こし、会話も成立しなかったことから、救急車で精神科の病院に搬送され、そのまま入院となりました。

病院で、彼女には、家族と呼べる家族がないこと、そして、出産を控えた妊婦さんであることがわかりました。そして出産の日を迎えました。まだまだ治療が必要な状態での出産だったため、赤ちゃんはすぐに施設に移されました。ほんの数日だけの親子の時間でした。

自分への信頼の喪失

赤ちゃんを喪った当初の彼女はこんな思いだったのではないのでしょうか。「母親の私がなぜ赤ちゃんと一緒に暮らせないのか？大丈夫っていつてるのに、周りはよってたかって自分を病気で何もできない人と決めつけている」

他者への信頼の喪失

赤ちゃんはどこに行ったのか、いつ会えるのか、一緒に暮らせる日がくるのか、誰も何も教えてくれませんでした。

周りの人たちはただ、「あなたに子どもを育てることは無理だ」と繰り返すだけでした。そんな状況に彼女が納得できるはずはありません。誰も本当のことを教えてくれない。誰も自分の気持ちを理解し、受け止めてくれない、そんな思いだったのではないのでしょうか。

あいまいな喪失の中で

それからの彼女は、子どもと一緒に暮らすことだけを目標に、毎日過ごすようになりました。何をすることも、「子どもと暮らすため」が彼女の行動のすべてになりました。では、いったいどうすれば子どもと暮らすことができるのか、誰も具体的に教えてはくれませんでした。「病気がよくなったら」「経済的に自立したら」周りの人はその時々でとってもあいまいな返答を彼女にします。

「病気がよくなる」とは、どういつことなのか。薬を飲まなくてもよいことが病気がよくなり、子どもと暮らすことができるということなのか。「経済的に自立」とは、生活保護でなくなればオッケーなのか。

大切なものを喪っているのに、何もかもがあいまいで、彼女はそのあいまいさの中で戸惑いました。大きな憤りも感じていたはずですが、しかし、その憤りを口にすると、「感情が不安定になっている」と言われ、ますます「子どもと暮らす」ことから遠ざかってしまう…。そんな毎日を通じていました。

先の見えない病の真ただ中にいる彼女は、感情をほとんど示すことなく、能面のような表情で、外の世界にも無関心のようにでした。傍から見ていると、誰かと自分から話をするこども、自分以外のことに関心を働かせるこども、ほとんどありません。誰にもつながらず、心の内を見せることもなく、自分の世界に閉じこもる…。そんな彼女に周囲の誰もが思いました。「やっぱり彼女に子どもを育てるなんて無理だ」

当時の彼女が自分なりに必死に考え導き出した答えが、子どもと暮らすには経済的に自立をしないとけない↓仕事をしなくてはいけない だったように思います。

中古本のび奇贈、 ありがとうございます！



社会福祉関係の中古本をたくさん献本していただきました。
何と段ボール箱 21 箱です！
それから、懐かしい「信仰偉人伝」。全巻ご寄贈いただきました。
今の大人たちもよく読んだ、伝統の良書です。

献本者お名前

坂岡大路 岡村正幸 長谷川和雄 杉内恵子
藤田明子 関正道 林貞子 (敬称略)

<お知らせ>

- ◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。
- ◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品(グッズ)の訪問販売を検討させて頂きます。ご相談ください。
- ◆古本を献本ください。特に絶版した良書を求めています。必要な方に有料で提供したいと思います。古本の売り上げ利益は、からしだね館で働く障害者の工賃や困窮外国人支援のために使わせて頂きます。
- ◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思います。

周囲の強い促しがあり、からしだねの就労施設で、仕事をするための準備をすることになりました。高齢者の配食サービスの作業で彼女は高齢の利用者宅でお弁当をお届けする作業を希望しました。高齢者へ関わる仕事をするので、今後高齢者の施設での仕事を見つけられるのではないかと、それが理由でした。しかし、能面のような表情と、言い切り口調の接客では、お金を払ってお弁当を購入して下さるお客様へのサービスとしてはNGでした。それを伝えると、「自分はきちんとやっている。そんな指摘を受ける理由はない。職員は自分のことが嫌いだから、そんな風に言われもないことをふっかけてくる」と反発しました。そのやりとりがずっと続きました。そして私たちはこう思いました。「彼女にお客様相手の作業は無理だ。一般で仕事をするのも厳しいに違いない」

彼女の喪失について思うこと

ある本に「涙は、必ずしも頬を伝うとは限らない。悲しみが極まった時、涙は滲れることがある。深い悲しみのなか、勇気をふりしぼって生きている人は皆、見えない涙が胸を流れることを知っている。」とありました。(『悲しみの秘儀』若松英輔著)

頬を伝わない涙 言葉にならないこころの声、人が大きな喪失にある時に、涙も滲れ、言葉も形にならないことがある。子どもと会えない、暮らせない毎日を過ごすことで、彼女の涙は滲れ、それを表現する言葉も見つからない、そんな状態になっていたのかもしれない。そのあいまいな喪失を一人で抱えて必死で生きていたのかもしれない。

たくさんの方の支援者がいたにも関わらず、その中で彼女の喪ったものをどれだけの人が痛んだのでしょうか。

彼女の喪失の物語りは続きます。子どもとの暮らしを願った彼女がその喪失の物語りの中でどうなっているのか。続きは次回の書店ニュースでお伝えします。

障害のこと、福祉のことで「こんなことを聞いてみたい」ということがあれば、ぜひ、C.L.Cからしだね書店 (clc@karashidane.or.jp) までお知らせください。



◆中古本をお譲りいただけませんか？

ご家庭に眠っている古本がありませんか？よろしければぜひお譲りください。

恐れ入りますが、無料でお譲りいただけるとありがたいです。

当店中古図書部で管理し、必要とされる方に、有料でお譲りします。

生じた利益は、CLCからしだね書店で働く利用者の賃金に還元します。

なお、当書店では、古本の取り扱いができる、古物商許可を得ています。
(古物商許可 NO：京都府 611102130003 号)

詳しくは、お電話かメールでお問い合わせください。

*中古図書部は目下在庫整理中です。準備が整い次第お知らせします。

◆あなたも「おすすめ本スポンサー」になってみませんか？

あなたのイチ押しの本を、店に置かせていただきます。



「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのお勧め本。

6か月間店頭に置いてみませんか？

残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうになったらいいなと思っています。)

ただし、本の選定や店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

編集後記

■OBJ (オペレーション・ブlessing・ジャパン) 様のご支援を頂き、書店用の車を購入することができました。教会への外販やお客様訪問などにフルに活用させていただきます。納車の日、OBJの広報責任者弓削恵則様をお迎えし、共に献別の祈りを捧げました。



◀本を積んで遠出も出来る、SUZUKIの新車「ソリオ」。

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル
〒607-8216 京都市山科区勸修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp